

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	六朝楽府訳注（十三）：「有所思」（下之下）八首
Author(s)	小川, 恒男
Citation	中國中世文學研究 , 62 : 57 - 76
Issue Date	2013-09-20
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00051445
Right	
Relation	



六朝樂府詠注（十三）——「有所思」（下之下）八首——

小川恒男

はしがき

『樂府詩集』卷十七・鼓吹曲辭二・漢魏歌中に「有所思」二十六首を収め、その内の二十首が六朝期の作である。遅々として進まない作業のために、二十首を以下のように分けて詠注を施すこととなつてしまつた。

〔詠注（九）〕（『中国学研究論集』第23号 二〇〇九）に「有所思」古辞及び齊・劉繪、同じく齊・王融の作、「詠注（十）」（同第24号 二〇一〇）に齊・謝朓・梁武帝蕭衍・簡文帝蕭綱の三首、「詠注（十一）」（同第25号 二〇一一）に昭明太子蕭統、王筠、庾肩吾の三首、「詠注（十二）」（同第27号 二〇一二）に梁・王僧孺、吳均、沈約・費昶の四首を収めた。

本稿には陳後主三首、顧野王、張正見、陸系、北齊・裴讓之、隋・盧思道の八首を収める。

これまでと同様に中国古典文学基本叢書『樂府詩集』（中華書局 一九七九）を底本とする。

陳・後主叔宝「有所思」三首其一

【本文及び書き下し】

- 1 蕩子好蘭期 蕩子は蘭期を好み
- 2 留人独自思 留人は独り自ら思ふ
- 3 落花同淚臉 落花は淚臉に同じく
- 4 初月似愁眉 初月は愁眉に似る
- 5 階前看草蔓 階前 草の蔓るを看
- 6 窗中对網糸 窗中 網糸に対す
- 7 不言千里望 言はざりき 千里を望んで
- 8 復是三春時 復た是れ三春の時なるとは

【日本語訳】

- 1 帰つて来ない人は蘭の花が咲き乱れる頃が好きだけど
- 2 留守を守る人は独りぼっちでももの思いに耽る
- 3 舞い散る花は頬を伝う涙のよう
- 4 三日月は愁いを帯びた眉のよう
- 5 階段の前に草が生い茂るのをじっと見て
- 6 窓から外を眺めようとしてもクモの巢と向かい合つたばかり
- 7 まさかあの人がいるはずの千里の彼方を眺めやつたま

ま

8 またもや春を迎えることになろうとは

【校勘】

○『古詩紀』卷九八

○「有所思」、『詩紀』題下注云『選詩拾遺』作『望遠』。

『選詩拾遺』は明・楊慎による総集。清・黃虞稷『千頃堂書目』に「楊慎『選詩拾遺』缺卷」とあり、現存しないようである。

7 「望」、『詩紀』作「別」、注云「一作『望』」。

【押韻】

「期」「思」「糸」「時」、上平七之韻。「眉」、上平六脂韻。脂・之同用。

【作者】

五五三〜六〇四。字は元秀、吳興長城（浙江省湖州市）の人。陳の宣帝頊の長子。太建十四（五八二）年、即位。禎明三（五八九）年、隋の文帝によって国を滅ぼされる。

その際、井戸の中に隠れたが、捕らえられてしまう。そのまま長安に送られ、年五十二で客死した。

亡国の君主として後世の評判は非常に悪いが、詩人としては梁簡文帝が提唱した「宮体」を継承し、艶麗な作が多い。今日、九十首あまりの詩篇が伝わっており、その大半が楽府である。

久保卓也氏「陳後主の文学に対する評価——唐・朱敬則「陳後主論」、呂温「人文化成論」から『漢魏六朝一百三家集』、『采菽堂古詩選』まで」（『福山大学人間文化学部紀要』第四卷 二〇〇四）に詳しい。

【語釈】

1 蕩子好蘭期 2 留人独自思

「蕩子」遠くへ行ったまま帰って来ない男。「古詩十九首」其二（『文選』卷二十九。『玉台』卷一作枚乘「雜詩」九首其五）に「昔為倡家女、今為蕩子婦。蕩子行不歸、空牀難独守（昔 倡家の女為り、今 蕩子の婦と為る。蕩子 行きて帰らず、空牀 独り守り難し）」と。王僧孺「有所思」にも「知君自蕩子、奈妾亦倡家（知る君 自ら蕩子なるを、奈せんや 妾も亦た倡家なるを）」とあった。

「蘭期」蘭の花の咲く頃。古い時代には他に用例を見ない。「蘭」は「古詩十九首」其六（『文選』卷二十九。『玉台』卷一作枚乘「雜詩」九首其四）に「涉江采芙蓉、蘭沢多芳草。采之欲遺誰、所思在遠道（江を涉りて芙蓉を采る、蘭沢 芳草多し。之れを采りて誰にか遺らんと欲する、思ふ所は遠道に在り）」とあり、また「古詩十九首」其八（『文選』卷二十九。『玉台』卷一）に「傷彼蕙蘭花、含英揚光輝。過時而不采、將随秋草萎（傷む 彼の蕙蘭の花、英を含みて 光輝を揚ぐ。時を過ぎて采らずんば、將に秋草に随ひて萎まん」とす）」

とあるように、若く美しい女性のイメージ。

「留人」故郷に留まっている人。六朝詩では他に用例を見ないが、「蕩子」と対になっていることから解した。

「自思」ひとりもの思いに耽る。漢・班彪「北征賦」『文選』巻九に「釈余馬於彭陽兮、且弭節而自思。」（余が馬を彭陽に釈き、且く節を弭めて自ら思ふ。）と。また、晋・陶淵明「擬古詩九首」其六に「裝束既有日、已与家人辞。行行停出門、還坐更自思。」（装束 既に日有り、已に家人と辞す。行き行く門を出づるを停め、還り坐して更に自ら思ふ）とある。

3 落花同涙臉 4 初月似愁眉

「落花」花が散る、また散った花。梁詩から多く見られるようになる。梁・沈約「会圃臨春風」『玉台』巻九作「臨春風」に「遊糸暖如網、落花雰似霧」（遊糸 暖として網の如く、落花 雰として霧に似る）とあり、陳叔宝自身も「上巳玄圃宣猷嘉辰禊酌各賦六韻以次成篇詩」に「鶯度遊糸斷、風駛落花多（鶯 度りて 遊糸 断たれ、風 駛せて 落花 多し）」というように、ハラハラと舞い散るイメージによって、次の涙がこぼれる様子を表現する。

「涙臉」顔の涙、また涙が流れる顔。張正見「有所思」にも「相思日度、涙臉年年流（相思 日日 度り、涙臉 年年 流る）」と見えるが、梁代以前には見えな

「初月」新月。「子夜四時歌・春歌」二十首其五に「碧樓冥初月、羅綺垂新風（碧樓 初月に冥く、羅綺 新風に垂る）」とあり、梁・沈滿願「映水曲」には「輕鬢浮雲、双蛾擬初月（輕鬢は浮雲に字び、双蛾は初月に擬す）」と、細い眉を新月の頃の月に喩える句が見られる。

「愁眉」愁いを帯びた眉。これも梁詩から見られる。梁・陸罩「閨怨詩」に「留步惜余影、含意結愁眉（歩みを留めて余影を惜しみ、意を含んで愁眉を結ぶ）」と。

5 階前看草蔓 6 窗中对網糸

「階前」きざはしの前。齊・謝朓「秋夜詩」『玉台』巻四に「何知白露下、坐視階前濕（何ぞ知らん 白露の下るを、坐して視る 階前の濕ふを）」（「階前」、『玉台』作「前階」と）。

「草蔓」草がはびこる。『楚辭』九歌・山鬼に「采三秀兮於山間、石磊磊兮葛蔓蔓（三秀を山間に採らんとすれば、石 磊磊として 葛 蔓蔓たり）」とあり、謝朓「王孫遊」『玉台』巻十に「綠草蔓如糸、雜樹紅英發（綠草 蔓りて糸の如く、雜樹 紅英 発く）」と。

「窗中」窓から見える屋外の事物。晋・潘岳「悼亡詩」三首其二（『文選』巻二十三、『玉台』巻三）に「皎皎窗中月、照我室南端（皎皎たり 窗中の月、我が室の南端を照らす）」と。

「網糸」クモの巣。梁・江淹「雜體詩」三十首・張司空

華 離情(『文選』卷三十一、『玉台』卷五)に「蘭徑少行迹、玉台生網糸(蘭徑行迹少なく。玉台 網糸生ず)」とあり、人の訪れが絶えてしまった様子を表現する。

7 不言千里望 8 復是三春時

「不言」思ひもよらない。予想外の事が生じたことをいう。釈大典『詩家推敲』に「不意……、不知……、不言通鳥道、不謂……、ミナ思案ノ外ナルライフ辞ナリ」と、唐・沈佺期「入少密溪」詩の「樹密不言通鳥道、鷄鳴始覺有人家(樹 密にして言はざりき 鳥道通ぜんとは、鷄 鳴いて 始めて覺る 人家有るを)」を引く。『漢語大詞典』は「不料(意外にも)」と解し、唐・宋之間の「桂州三月三日」(『全唐詩』卷五十一題下注「一作『桂陽三日述懷。』」)詩の「愚謂嬉遊長似昔、不言流寓歎成今(愚かにも謂へらく 嬉遊 長に昔に似ると、言はざりき 流寓 歎ち今と成るを)」を引くが、梁・費昶「長門怨」(『玉台』卷六作「長門后怨」)に「金屋貯嬌時、不言君不入(金屋 嬌を貯ふる時、言はざりき 君入らずとは)」とあり、鈴木虎雄氏は『玉台新詠集(中)』 岩波書店 一九五五)で「不言 不謂の意。」と注す。

「千里望」恋しい人がいるはずの千里の彼方を眺めやったまま。宋・吳邁遠「陽春歌」に「百里望咸陽、知是帝京城(百里 咸陽を望めば、知る 是れ帝京の城な

るを)」とあるが、「○○○里望」という型式は他に見当たらない。『古詩紀』は「千里別」に作る。こちらは宋・南平王劉鑠「代收淚就長路詩」に「蕭条万里別、契闊三秋分(蕭条たり 万里の別れ、契闊たり 三秋の分かれ)」と見え、梁・江淹「雜體詩」三十首・謝法曹惠連 贈別(『文選』卷三十一)に「方作雲峯異、豈伊千里別(方に雲峯の異てを作し、豈に伊れ千里の別れのみならんや)」と。

「三春」春の三ヶ月間。漢・班固「終南山賦」に「三春之季、孟夏之初、天氣肅清、周覽八隅。(三春の季、孟夏の初め、天氣 肅清にして、八隅を周覽す。)」と。

陳・後主叔宝「有所思」三首其二

【本文及び書き下し】

- 1 杳杳与人期 杳杳として 人と期し
- 2 遥遥有所思 遥遥として 思ふ所有り
- 3 山川千里間 山川 千里の間
- 4 風月兩辺時 風月 兩辺の時
- 5 相待春那劇 相ひ待てば 春は那ぞ 劇なる
- 6 相望景偏遲 相ひ望めば 景は偏へに遅し
- 7 当由分別久 当に分別して久しきに由るべし
- 8 夢來還自疑 夢に來たるも還た自ら疑ふ

【日本語訳】

1 あの人と夜の闇の中でお会いしましょうと約束しまし

た

2 恋しいあの人がいるのは、遠い遠いところ。

3 山や川を隔てた千里の彼方ですけど

4 あちらでもこちらでも、風が吹いて月が照らしている
でしょう

5 あつという間に過ぎ去る春と向かい合い

6 思うほどには沈んでくれない夕陽を眺めていました

7 お別れて随分になるからでしょうか

8 夢でお姿を見ても、それがあの人なのかどうかなかなか
信じられなくなっています

【校勘】

○『古詩紀』卷九八

1 「杳杳」、底本作「杳杳」。拠『詩紀』而改。

5 「待」、『詩紀』作「対」。

6 「望」、底本作「近」。拠『詩紀』而改。

【押韻】

「期」「思」「時」「疑」、上平七之韻。「遅」、上平六脂韻。

脂・之同用。

【語釈】

1 杳杳与人期 2 遙遙有所思

「杳杳」夕暮れ時の薄暗い様。「古詩十九首」(『文選』

卷二十九) 其十三に「下有陳死人、杳杳即長暮(下に

陳死の人有り、杳杳として長暮に即く」と。底本の
「杳杳」、多弁のさま、素速いさま、また騒がしいさ
ま。

「与人期」人と会う約束をする。魏・曹丕「秋胡行」に
「朝与佳人期、日夕殊不来(朝に佳人と期し、日夕
殊に来たらず)」と。

「遙遙」空間的に、或いは時間的に遠く隔たっているさ
ま。宋・鮑照「代東門行」(『文選』卷二十八)に「遙
遙征駕遠、杳杳白日晚(遙遙として征駕は遠く、杳杳
として白日は晩る)」

3 山川千里間 4 風月兩辺時

「山川千里間」二人の間には山や川があつて千里を隔て
ている。晋・陶淵明「与殷晋安別詩」に「山川千里外、
言笑難為因(山川 千里の外、言笑 因と為し難し)」
と。

「風月」清々しい風と明るい月の光。しばしば美しい風
景をいう。北周・庾信「奉和永豐殿下言志詩十首」其
十に「野情風月曠、山心人事疎(野情 風月 曠く、
山心 人事 疎なり)」と。

「兩辺」端と端。「古詩十九首」(『文選』卷二十九) 其
一に「相去万余里、各在天一涯(相ひ去ること万余里、
各おの天の一涯に在り)」とある表現のヴァリエーショ
ンのひとつ。

5 相待春那劇 6 相望景偏遲

「相待」向かい合う。「對待」に同じ。晋・無名氏「三洲歌」第一曲に「送欵板橋灣、相待三山頭（欵を送る板橋灣、相ひ待つ 三山の頭）」と。

「春那劇」春はなんと速やかに過ぎ去るのか。劇、素速い。漢・揚雄「劇秦美新」(『文選』卷四十八)に「二世而亡、何其劇与。(二世にして亡ぶ、何ぞ其の劇しきや。)」とあり、李善注に「劇、甚也。言促甚也。(劇は、甚なり。促やかなることの甚しきを言ふなり。)」と。晋・傅玄「青青河边草篇」(『玉台』卷二)に「草生在春時、遠道還育期(草の生ずるは春時に在り、遠道還るに期有り)」とあるように、出征など旅に出た夫や恋人が帰って来るのは春、というイメージがある。

「相望」向かい合う。「古詩十九首」其三に「兩宮遥相望、双闕百余尺(兩宮 遥かに相ひ望み、双闕 百余尺)」と。

「景偏遲」日がなかなか沈もうとしてくれない。景は太陽。偏、思いのほか。宋・謝惠連「予章行」に「促生靡緩期、迅景無遲蹤(促生は期に緩む靡く、迅景は蹤に遅るる無し)」と。

7 当由分別久 8 夢来還自疑

「分別」離別に同じ。三国魏・曹丕「与朝歌令吳質書」

(『文選』卷四十二)に「今果分別、各在一方。(今果して分別し、各おの一方に在り。)」と。

「夢来」夢に現れる。梁・沈約「朝雲曲」に「常不息、夢来遊(常に息まず、夢に來たり遊ぶ)」と。漢・無名氏(『文選』卷二十七作古辞、『玉台』卷一作蔡邕)に「遠道不可思、夙昔夢見之(遠道 思ふべからず、夙昔 夢に之れを見る)」と。

「自疑」自分でも信じられない。南朝宋・吳邁遠「長別離」(『玉台』卷四)に「持此断君腸、君亦宜自疑(此れを持すれば君が腸を断ち、君も亦た宜しく自ら疑ふべし)」と。

陳・後主叔室「有所思」三首其三

【本文及び書き下し】

- 1 佳人在北燕 佳人 北燕に在り
- 2 相望渭橋辺 相ひ望む 渭橋の辺
- 3 团团落日樹 团团たる落日の樹
- 4 耿耿曙河天 耿耿たる曙河の天
- 5 愁多明月下 愁ひは多し 明月の下
- 6 淚尽雁行前 涙は尽く 雁行の前
- 7 別心不可寄 別心 寄すべからず
- 8 唯余琴上弦 唯だ余す 琴上の弦

【日本語訳】

- 1 あの人北の地にいらっしやるから
- 2 渭橋のたもとに立って、そちらの方を眺めます
- 3 丸い夕陽が樹々に落ちかかり

- 4 夜明けの天の川が明々と天に横たわって見えるまで
- 5 満月に照らされて愁いは深く
- 6 北に帰って行く雁の列を見上げれば涙が涸れ果てます
- 7 別れの悲しみは言葉ではお伝えできません
- 8 琴が奏でる調べだけはまだ鳴り止まないうでいます

【校勘】

○『文苑英華』卷二〇二・『古詩紀』卷九八
無異同。

【押韻】

「燕」「辺」「天」「前」「弦」、下平一先韻。

【語釈】

1 佳人在北燕 2 相望渭橋辺

「佳人」妻が夫をいう。三国魏・曹植「雜詩」五首（『玉台』卷二）其四に「佳人在遠道、妾身独单裳（佳人遠道に在り、妾身 独り单裳）」と。

「北燕」北方というのと同じ。都から見て北にある燕の地方、現在の河北省一帯。一句、漢・李延年「歌」に「北方有佳人、絶世而独立（北方に佳人有り、絶世にして独り立つ）」とあるのを踏まえるが、李の「佳人」は絶世の美女をいうのに対し、ここは夫を指す。

「相望」向き合う。前詩第6句に「相望景偏遲（相ひ望めば 景は偏へに遅し）」とあった。その語釈参照。

「渭橋」渭水に架かる橋。梁代頃から北方または西方に旅立つ人を見送る場所として描かれるようになる。梁元帝蕭繹「春別応令詩四首」其四に「日暮徙倚渭橋西、正見涼月与雲齊（日暮 徙倚す 渭橋の西、正に見る 涼月の雲と齊しきを）」と。

3 团团落日樹 4 耿耿曙河天

「团团」まるい様。漢・班婕妤「怨歌行」（『文選』卷二十七）、『玉台』卷一作「怨詩」に「裁為合歡扇、团团似明月（裁ちて合歡扇と為し、团团として明月に似る）」とあるように月や露を形容することが多いが、梁・吳均「迎柳吳興道中詩」に「团团として 日 西に靡き、客念 已に蹉跎たり」と夕陽に用いる例が梁代から見られるようになる。

「落日」夕陽。魏・徐幹「情詩」（『玉台』卷二）に「微風起闔闔、落日照階庭（微風 闔闔に起こり、落日階庭を照らす）」と。

「耿耿」明るい様。齊・謝朓「暫使下都夜發新林至京邑贈西府同僚」詩（『文選』卷二十六）に「秋河曙耿耿、寒渚夜蒼蒼（秋河は曙に耿耿として、寒渚は夜に蒼蒼たり）」とあり、李善注に「耿耿、光也。」と。

「曙河」明け方の天の川。詩ではこれ以前の用例は見当たらない。『初学記』三十に引く梁・蕭和「萤火賦」に「曙河之低漢、聞伺潮之遠声。（曙河の漢に低るるを曙、潮を伺ふの遠声を聞く。）」と見えるのが数少ない用例。

5 愁多明月下 6 淚尺雁行前

「愁多」愁いが深い。「古詩十九首」其十七に「愁多知夜長、仰觀衆星列（愁ひ多くして夜の長きを知り、仰ぎて衆星の列なるを觀る）」とある。鈴木虎雄氏は「さまざまのしんばいがあると」と訳し、花房英樹氏は『文選（詩騷編）四』（集英社 一九七四）で「物思いが多いので」と訳すが、「多情」と同じように愁いの量が多いことではないかと思う。

「淚尺」涙が洒れ果てる。梁簡文帝蕭綱「曉思詩」（『玉台』卷七作「武陵王紀」、『芸文類聚』三十二作「梁簡文帝」）に「紅妝隨淚尺、蕩子何時迴（紅妝 涙の尽くるに隨せ、蕩子 何れの時にか迴らん）」と。

「雁行」空を飛ぶ雁の行列。佐藤保『漢詩のイメージ』（大修館書店 一九九二）に「秋の訪れとともに北から飛んで来て、過ぎゆく春とともに北に帰って行く雁は、中国の渡り鳥の代表である。雁とまったく逆の動きをする燕とともに、季節の移り変わりを人々に知らせる候鳥——時候の変化とともに移り動く鳥——である。しかし、なんととっても、雁の最も重要な、そして最も人びとに親しまれたイメージは、たよりを運ぶ鳥というイメージであろう。イメージをつくるものになった故事は、『漢書』蘇武伝に見える蘇武の事跡にもとづく。」とある。秋が深まり、雁が列を成して夫

のいるはずの北方に飛んでいく様を描く。

7 別心不可寄 8 唯余琴上弦

「別心」別離によつて生ずる思い。梁・蕭子顯「春別詩」四首（『玉台』卷九）其四に「銜悲攬涕別心知、桃花李色任風吹（悲しみを銜み涕を攬りて 別心 知る、桃花 李色 風の吹くに任ず）」と。

「不可寄」胸の内を託して伝える手立てがない。徐幹「室思詩」六章（『玉台』卷一）第三章に「飄飄不可寄、徒倚徒相思（飄飄として寄すべからず、徒倚として徒に相ひ思ふ）」と。

「唯余」惟余とも。ただしだけが残っている。宋・吳邁遠「秋風曲」（『玉台』卷四作「鮑令暉古意贈今人」）に「容華一朝尽、唯余心不變（容華 一朝に尽き、唯だ余す 心の変はらざるを）」と。

「琴上弦」琴で演奏される曲。梁・何遜「詠春風詩」（『玉台』卷十）に「鏡前飄落粉、琴上響余声（鏡前に落粉 飄り、琴上に余声響く）」と。

陳・顧野王「有所思」

【本文及び書き下し】

- 1 賤妾有所思 賤妾は思ふ所有り
- 2 良人久征戍 良人は久しく征戍す
- 3 笳鳴塞表城 笳は鳴る 塞表の城に
- 4 花開落芳樹 花は開きて 芳樹落つ
- 5 白登澄月色 白登に月色澄み

- 6 黄龍起煙霧 黄龍に煙霧起こる
 7 還聞雉子斑 還つて雉子斑を聞く
 8 非復長征賦 復た長征の賦に非ず

【日本語訳】

- 1 わたしには恋しいあなたがいるのに
 2 そのあなたはもう長い間出征したまま
 3 あし笛が国境の砦に鳴り響いていることでしょう
 4 こちらはでは花が咲いて、また散ってしまいました
 5 白登台では月の光が白く透き通り
 6 黄龍では黄色い砂煙が舞い上がっているでしょう
 7 離に二度と会えなくなる親鳥の嘆きを歌う「雉子斑」
 が聞こえます
 8 それはいつかは再会できる「長旅の歌」ではないので
 す

【校勘】

- 『文苑英華』巻二〇二・『古詩紀』巻一一六
 3 「塞表城」、底本云「一作『明塞表』」。『英華』作「故
 塞表」、云『故』、一作『胡』、又云「一作塞城表」。
 『詩紀』作「塞城表」、云「一作『胡塞表』」。
 4 「開」、『英華』作「閑」。

【押韻】

「戍」「樹」「霧」「賦」、去声十遇韻。

【作者】

五一九〇五八一。梁・陳の文字学者、作家、画家。字は希馮。呉郡呉（江蘇省蘇州市）の人。梁の宣城王蕭大器の王褒とともに賓客となった時、王のために古賢の像を描き、褒も賛を作つて「二絶」と称された。また、簡文帝蕭綱の命を受け『玉篇』を撰した。梁が滅びると陳に仕え、黄門侍郎、光祿卿などを歴任した。現在、詩十首を伝えるが、大半が樂府である。

【語釈】

- 1 賤妾有所思 2 良人久征戍
 「賤妾」夫の帰りを待ちわびる妻の自称。「古詩十九首」
 其八に「君亮執高節、賤妾亦何為（君 亮に高節を執
 らば、賤妾も亦た何をか為さん）」と。
 「良人」妻が夫をいう。「古詩十九首」其十六に「良人惟
 古歛、枉駕惠前綏（良人 古歛を惟ひ、駕を枉げて前綏
 を恵す）」と。
 「征戍」辺境に出征して駐屯する。梁・蕭子顯「燕歌行」
 （『玉台』巻九）に「遥看白馬津上吏、伝道黄龍征戍兒
 （遙かに看る 白馬津上の吏、伝へ道ふ 黄龍征戍の
 兒）」と。

3 笳鳴塞表城 4 花開落芳樹

「笳鳴」笳はあし笛、胡笳とも。漢・蔡琰「悲憤詩」二

首其二に「胡笳動兮辺馬鳴、孤雁帰兮声嚶嚶（胡笳動きて 辺馬 鳴き、孤雁 帰りて 声 嚶嚶たり）」とあり、宋・謝靈運「從遊京口北固亭詔詩」（『文選』卷二十二）に「鳴笳發春渚、税鑾登山椒（笳を鳴らして春渚を發し、鑾を税して山椒に登る）」と。

〔塞表〕塞外の意。『三國志』魏志・田疇伝に「封疇亭侯、邑五百戸。（疇を亭侯、邑五百戸に封ず。）」とあり、裴松之注に引く『先賢行狀』に曹操の「表論田疇功」文を載せて、「疇 兵五百を帥み、山谷を啓導し、遂に烏丸を滅ぼし、塞表を蕩平す。」という。

〔落芳樹〕樹木に咲いた花が散る。「芳樹」はまた樂府の曲名。『六朝樂府詠注』（六）——「芳樹」（上）一首——

（『中国学研究論集』第16号 二〇〇七）参照。

5 白登澄月色 6 黄龍起煙霧

〔白登〕山名、また台の名。『史記』匈奴列伝に「高帝先至平城、歩兵未尽到。冒頓縱精兵四十万騎围高帝於白登。七日、漢兵中外不得相救餉。（高帝 先づ平城に至るも、歩兵 未だ尽くは到らず。冒頓精兵四十万騎を縦ち高帝を白登に囲む。七日、漢の兵 中外 相ひ救餉するを得ず。）」と見え、『正義』に「白登台、在白登山上、朔州定襄県東三十里。定襄県、漢平城県也。（白登台、白登山上に在り、朔州定襄県の東三十里。定襄県は、漢の平城県なり。）」とある。今、山西省大同市の東。ここは次の「黄龍」とともに辺塞の地をいう。

〔月色〕月光。また、その白さをいう。詩では梁代から盛んに用いられるようになった。梁簡文帝蕭綱「和湘東王三韻詩二首」（『玉台』卷七）其一「春宵」に「風声隨篠韻、月色与池同（風声 篠に随ひげ韻き、月色 池と同じ）」と。

〔黄龍〕城の名。龍城とも。今の遼寧省朝陽市の付近にあった。五胡十六国の一、北燕（四〇九〜三八）が都を置いた。『宋書』蛮夷伝・高句麗国に「義熙初、「慕容」宝弟熙為其下馮跋所殺、跋自立為主、自号燕王、以其治黄龍城、故謂之黄龍国。（義熙の初め、「慕容」宝の弟 熙 其の下の馮跋の殺す所と為り、跋 自ら立ちて主と為り、自ら燕王を号し、其の治 黄龍城なるを以ての、故に之れを黄龍国と謂ふ。）」とある。義熙は東晋の年号、四〇五〜一八。第2句「征戍」の語釈に引いた蕭子顯「燕歌行」に見えた。

〔煙霧〕けむりとかすみ。もややきり。梁・沈約「出重困和傅昭詩」に「邯鄲風雨散、白登煙霧維（邯鄲に風雨 散り、白登に 煙霧 維ふ）」と。

7 還聞雉子斑 8 非復長征賦

〔雉子斑〕樂府の曲名。宋・嚴羽「滄浪詩話」考証に「古詞之不可読者、莫如『巾舞歌』、文義漫不可解。又古『將進酒』『芳樹』『石留』『予章行』等篇、皆使人読之茫然。又『朱鷲』『稚子斑』『艾如張』『思悲翁』『上之回』等、只三句可解。豈非歲久文字舛訛而然耶。（古詞の

読むべからざる者、『巾舞歌』に如くは莫し、文義漫りに解すべからず。又た古の『将進酒』『芳樹』『石留』『子章行』等の篇、皆な人をして之れを読んで茫然たらしむ。又た『朱鷺』『稚子斑』『艾如張』『思悲翁』『上之回』等、只だ二三句解すべきのみ。豈に歳久しく

文字舛訛して然るに非ざらんや」とあり、古来難解で知られるが、余冠英氏が『樂府詩選』（人民文学出版社 一九五三）に「這詩写雉鳥親子死别的哀情（この詩はキジの親子の死別の哀しみを描く）」と述べるように、全体としては別離の悲哀を詠う。

「長征賦」僻遠の地への旅を描いた賦。「雉子斑」に対して具体的な作品があつたのかもしれないが、現存していない。「長征」の語、六朝詩には見当たらない。唐詩には王昌齡「出塞」二首其一に「秦時明月漢時関、万里长征人未還（秦時の明月 漢時の関、万里 长征人 未だ還らず）」などの用例が現れる。

「非復」もう以前のようなくではない。沈約「別范安成詩」（『文選』卷二十）に「及爾同衰暮、非復別離時（爾と同一に衰暮せば、復た別離の時に非ざらん）」と。

陳・張正見「有所思」

- 【本文及び書き下し】
- 1 深閨久離別 深閨 久しく離別し
 - 2 積怨転生愁 積怨 転た愁ひを生ず
 - 3 徒思裂帛雁 徒らに思ふ 裂帛の雁

- 4 空上望帰楼 空しく上る 望帰の楼
- 5 看花憶塞草 花を看ては塞草を憶ひ
- 6 对月想边秋 月に対しては边秋を想ふ
- 7 相思日度 相ひ思ひて 日日 度り
- 8 涙臉年年流 涙臉 年年 流る

【日本語訳】

- 1 奥の寢室で長いお別れを過ごしていますと
- 2 積もる不満がますますもの悲しさを生み出します
- 3 雁が絹の手紙を届けてくれるのを待っても無駄なのに
- 4 楼に上つてあの人帰つて来るのを眺めても虚しいのに

- 5 花を見やつては辺境の草から思いが離れませんし
- 6 月と向かい合つては国境の秋に思いをめぐらせませす
- 7 思つて思つて一日また一日を過ごし
- 8 涙を浮かべた顔で一年また一年が流れ去ります

【校勘】

- 『文苑英華』卷二〇二・『古詩紀』卷一一一
- 6 「秋」、『英華』誤作「愁」。
 - 7 「度」、『英華』作「夜」、注云「一作『度』」。『詩紀』注云「玉台』作『暮』、『玉台』不載此作、未詳。

【押韻】

「愁」「楼」「秋」「流」、下平十八尤韻。

【作者】

生没年不詳。梁・陳に仕えた。字は見蹟、清河の東武城（山東省東武城の西北）の人。梁の簡文帝が東宮にあつた時、年十三にして頌を獻じて大いに賞賛された。梁末の喪乱の際には匡俗山（廬山のこと）に難を避けたが、陳の武帝が即位（五五七年）するに及び、詔によつて都健康に召還され、宣帝の大建（五六九〜五八二）中に没した。時に年四十九。『陳書』三十四・『南史』七十二に伝がある。『陳書』本伝には「其五言詩尤善、大行於世。

（其の五言詩 尤も善し、大いに世に行はる。）と評するが、南宋・嚴羽は『滄浪詩話』考証で「南北朝人惟張正見詩最多、而最無足省發。所謂『雖多亦奚以為』。（南北朝の人 惟だ張正見の詩のみ最も多くして、最も省發するに足る無し。所謂『多しと雖も亦た奚を以て為さん』）」と酷評する。道坂昭廣氏の「良くも悪くも陳の文学の一面を象徴する詩人である。」（興膳宏編『六朝詩人伝』大修館書店 二〇〇〇）という評が公平なところだと思ふ。

【語釈】

1 深閨久離別 2 積怨転生愁

「深閨」女性の寢室。齊・王融「春遊廻文詩」に「離情隔遠道、歎結深閨中（離情 遠道を隔て、歎きは深閨の中）に結ぶ」と。

「久離別」別れてから長い時間が経った。「古詩十九首」其十七に「客從遠方來、遺我一書札。上言長相思、下言久離別（客 遠方より来たり、我に一書札を遺る。上には長く相ひ思はんと言ひ、下には久しく離別すと言ふ）」とあるのを踏まえて、第3句を導き、自分には手紙さえ届かないことを詠う。

「積怨」長い間に積もり積もった不満や悲しみ。『淮南子』人間訓に「夫積愛成福、積怨成禍。（夫れ積愛は福を成し、積怨は禍ひを成す。）」と。

「生愁」もの悲しさが新たに生じる。梁簡文帝蕭綱「傷離、新体詩」に「猶是銜杯共賞処、今茲對此独生愁（猶ほ是れ杯を銜んで共に賞せし処、今茲 此れに對すれば独り愁ひを生ず）」と。

3 徒思裂帛雁 4 空上望帰樓

「徒思」思い続けても無駄だと分かっているが思ってしまう。梁・蕭子範「入元襄王第詩」に「一同西靡柏、徒思芳樹蕭（一に西に靡く柏に同じく、徒らに芳樹の蕭しきを思ふ）」と。

「裂帛」切り裂いた絹布に書いた手紙。梁・江淹「恨賦」
（「文選」卷十六に「裂帛繫書、誓還漢恩。（帛を裂きて書を繫げ、漢恩を還さんことを誓ふ。）」とあり、李善注は『漢書』蘇武伝を引いて「常惠教漢使者謂單于、言天子射上林中、得鴈、足有係帛書、蘇武等在某沢中。（常惠 漢の使者をして單于に謂はしめて、言ふ 天

子 上林中に射て、鴈を得るに、足に帛書を係くる有り、蘇武等 某沢中に在り、と。」。

「上々楼」より遠くを眺めようと楼に登る。梁・武陵王蕭紀「閨妾寄征人」(『玉台』卷七)に「願君看海氣、憶妾上高楼(願はくは 君海氣を看て、妾の高楼に上るを憶はんことを)」。

「望婦」あの人が帰ってくるのを待ち望んで遠くを眺める。齊・謝朓「送江水曹遠還館詩」に「上有流思人、懷旧望婦客(上に流思の人有り、旧を懷ひて婦客を望む)」と。

5 看花憶塞草 6 对月想边秋

「塞草」国境のとりで周辺の草。沈約「有所思」に「関樹抽紫葉、塞草発青牙(関樹 紫葉 抽で、塞草 青牙 発す)」と見えた。鮑照「蕪城賦」(『文選』卷十一)に「白楊 早く落ち、塞草 前に衰ふ。」とあり、李善注は漢・李陵「答蘇武書」(『文選』卷四十一)の「涼秋九月、塞外草衰。(涼秋九月、塞外 草 衰ふ。)」を引く。

「对月」月と向かい合う。六朝詩ではこの詩の例が早いようである。

「边秋」边塞の秋。何遜「学古詩三首」其三に「季月边秋重、嚴野散寒蓬(季月 边秋 重く、嚴野 寒蓬散す)」と。

7 相思日 8 淚臉年年流

「日日」来る日も来る日も。梁・劉綏「敬酬劉長史詠名士悅傾城詩」(『玉台』卷八)に「夜夜言嬌尽、日日態還新(夜夜 言 嬌 尽き、日日 態 還た新たなり)」。

「度」ここは時間を過ぐすこと。梁簡文帝蕭綱「倡婦怨情詩十二韻」(『玉台』卷七)に「含涕坐度日、俄頃變炎涼(涕を含み 坐して日を度り、俄頃 炎涼變ず)」と。

「淚臉」頬をつたう涙、また涙が浮かんだ顔。梁代以前には見当たらない。陳後主「有所思」三首其一に「落花同淚臉、初月似愁眉(落花は淚臉に同じく、初月は愁眉に似る)」とあった。

「年年流」一年、また一年と歳月が水の流れのように過ぎ去る。鮑照「登雲陽九里埭詩」に「宿心不復帰、流年抱衰疾(宿心 復た帰らず、流年 衰疾を抱く)」。

陳・陸系「有所思」

【本文及び書き下し】

- 1 別念限城闌 別念 城闌に限られ
- 2 還思楼上人 還つて思ふ 楼上の人
- 3 淚想離前落 涙は離るる前を想ひて落ち
- 4 愁聞別後新 愁ひは別れし後を聞きて新たなり
- 5 月来疑舞扇 月 来れば 舞扇かか疑ひ
- 6 花度憶歌塵 花 度れば 歌塵を憶ふ
- 7 只看今夜裡 只だ看る 今夜の裡

8 那似隔河津 　　那んぞ河津に隔てらるるに似たる

【日本語訳】

- 1 別れの悲しみは城壁にさえぎられても
- 2 楼に上っているだろう君のことをやはり思ってしまう
- 3 涙は別れの前のことを思い出してハラハラとこぼれ
- 4 愁いは別れて後のことを耳にして新たになる
- 5 月が現れると舞う君の扇かと目を疑い
- 6 花が咲きこぼれると君の歌声を思い出す
- 7 今夜は思い知らされるばかりだ
- 8 天の川に隔てられたあの二人になんと似ていることだろうと

【校勘】

- 『文苑英華』卷二〇二・『古詩紀』卷一〇七
- 0 「陸系」、『英華』作「陸系」。
 - 1 「限」、底本作「恨」、『英華』同。拠『詩紀』改。
 - 3 「離」、『英華』作「愁」、注云「一作『離』」。
 - 4 「聞」、『英華』作「開」、注云「一作『聞』」。
 - 7 「今夜」、『英華』作「月彩」、注云「一作『今度』」。

【押韻】

「闌」「人」「新」「塵」「津」、上平十七真韻。

【作者】

生没年未詳。事跡も不明。現存する詩は「有所思」一首のみ。

【語釈】

1 別念限城闌 　　2 還思楼上人

「別念」別離によって生じる思い。梁・任昉「別蕭諮議衍詩」に「離燭有窮輝、別念無終緒（離燭に窮輝有り、別念に終緒無し）」と。陳後主「有所思」三首其三に「別心不可寄、唯余琴上弦（別心 寄すべからず、唯だ余す 琴上の弦）」と「別心」の語があった。

「限」へだてられる。魏文帝曹丕「燕歌行」二首其一「文選」卷二十七、『玉台』卷九に「牽牛織女遥相望、爾獨何辜限河梁（牽牛 織女 遥かに相ひ望み、爾 独り何の辜ありてか 河梁に限らる）」と。「辜」、『玉台』誤作「幸」。

「城闌」城を守るために門から張り出すように築かれた曲がった城壁。鮑照「行葉至城東橋詩」（『文選』卷二十二）に「嚴車臨迴陌、延瞰歷城闌（車を嚴へて迴陌に臨み、延く瞰て 城闌を歴たり）」とあり、李善注に「『毛萇詩伝』曰、『闌、城曲也』。（『毛萇詩伝』に曰く、『闌は、城曲なり』と。）」という。

「楼上人」夫の帰りを待つて楼に上っている女性。「古詩十九首」其二に「盈盈楼上女、皎皎当窗牖（盈盈たり 楼上女、皎皎として窗牖に当たる）」。

3 涙想離前落 4 愁聞別後新

「涙想く落」涙はゝのことを想つてこぼれる。陳・陳昭「聘齊經孟嘗君墓詩」に「悲隨白楊起、涙想雍門来（悲しみは白楊に隨ひて起こり、涙は雍門を想ひて来たる）」と見えるが、唐以降はほとんど見当たらない。

「離前」別れる前。「別後」との対は梁・庾肩吾「七夕詩」に「離前忿促夜、別後对空機（離るる前は促夜に、忿り、別れし後は空機に對す）」。

「別後」別れた後。梁・昭明太子蕭統「有所思」に「別前秋葉落、別後春花芳（別前には 秋葉 落ち、別後には 春花 芳し）」とあつた。

5 月来疑舞扇 6 花度憶歌塵

「月来」月と扇との比喩は、漢・班婕妤「怨歌行」（『文選』卷二十七、『玉台』卷一作「怨詩」）に「裁為合歡扇、团团似明月（裁ちて合歡の扇と為し、团团 明月に似る）」と見える。

「舞扇」舞う時に用いる扇。六朝詩には外に用例が見当たらない。

「花度」花片が風に舞い散る。陳・江総「春日詩」「浴鳥沈還戲、飄花度不歸（浴鳥は沈みて還た戯れ、飄花は度りて帰らず）」と。

「歌塵」人を魅了する歌声。劉向「別録」（『芸文類聚』卷四十三）に「漢興以來、喜『雅歌』者魯人虞公、発声清哀、蓋動梁塵。（漢 興りて以來、『雅歌』を喜ぶ

者は魯人の虞公、声を発すれば清哀にして、蓋し梁の塵を動かせしならん。」とあるのに拠る。梁・朱超「舟中望月詩」に「若教長似扇、堪抔艶歌塵（若し長く扇に似しむれば、艶歌の塵を抔ふに堪へん）」と。

7 只看今夜裡 8 那似隔河津

「只看」「那似」いずれも六朝詩には他の用例が見当たらない。

「河津」天の川の渡し場。梁・沈約「織女贈牽牛詩」に「塵生不復抔、蓬首对河津（塵 生ずるも 復た抔はず、蓬首 河津に對す）」と。また、「古詩十九首」其十に「河漢清且淺、相去復幾許。盈盈一水間、脈脈不得語（河漢 清く且つ淺し、相ひ去ること 復た幾許ぞ。盈盈たる 一水の間、脈脈として 語るを得ず）」と。

北齊・裴讓之「有所思」

【本文及び書き下し】

- 1 夢中雖暫見 夢中 暫く見ゆと雖も
- 2 及竟始知非 覚むるに及んで始めて非なるを知る
- 3 展転不能寐 展転として寐ぬる能はず
- 4 徙倚独披衣 徙倚として 独り衣を披る
- 5 悽悽晓風急 悽悽として 晓風 急に
- 6 唵唵月光微 唵唵として 月光 微かなり
- 7 室空常達旦 室 空しくして 常に旦に達し

8 所思終不歸 思ふ所は終に歸らず

【日本語訳】

1 夢の中でほんの僅かな時間だけお目にかかれましたが
2 目が覚めてみると、それが現実ではなかったと分かり
ました

3 眠れないまま寝返りを繰り返す

4 ひとりでぼつちで服を羽織り歩き回りました

5 夜明けの風がせわしないのもの寂しく

6 薄闇の中、月の光がだんだんと微かになっていきます

7 寝室に人の気配がないまま、いつも夜明けを迎えます

8 あの人はどうとうお帰りになりませんでしたから

【校勘】

○『文苑英華』卷二〇二・『古詩紀』卷二二〇

0 「北齊・裴讓之」、底本作「魏裴讓之」、注云「按『北

齊書』裴讓之伝、作北齊時人。」

4 「徙」、『英華』誤作「徒」。

5 「悽悽」、『英華』作「凄凄」。

7 「常」、『英華』作「当」、注云「一作『常』」。

【押韻】

「非」「衣」「微」「歸」、上平八微韻。

【作者】

生没年未詳。東魏から北齊にかけての文人。字は士礼。幼くして父を亡くしたが、学問を好み、早くから名声を得ていた。東魏の孝静帝の天平（五三四～三七）年間に秀才に挙げられ、屯田主客郎中に進むと省中で「能賦詩、裴讓之。（能く詩を賦するは、裴讓之。）」と称された。北齊の文宣帝の時、清河太守に任じられ善政を行ったが、侍中だった高德政の讒言にあつて自殺に追い込まれた。現存する詩は「有所思」も含めて僅かに三首。『北齊書』列伝二十七に伝がある。

【語釈】

1 夢中雖暫見 2 及覺始知非

〔夢中〕齊・謝朓「詠邯鄲故才人嫁為厮養卒婦」(『玉台』

卷四)に「夢中忽髣髴、猶言承讎私(夢中 忽ち髣髴

たり、猶ほ言ふ 讎私を承くと)」とある。

〔暫見〕しばし姿を見せる。宋・鮑照「詠秋詩」に「何

由忽靈化、暫見別離人(何に由りてか 忽ち靈化し、暫

く別離の人を見んや)」。

〔及覺〕目が覚めてみると。漢・桓譚「新論」祛蔽に「夢

其五藏出在地、以手収而内之。及覺、病喘悸大少氣。

病一歲。(其の五藏の出でて地に在り、手を以て収めて

之れを内るるを夢む。覺むるに及び、喘悸を病み大い

に氣少なし。病むこと一歲。)と。

〔知非〕思い違いだったことが分かる。梁・沈約「為隣

人有懷不至詩」(『玉台』卷十)に「言是定知非、欲笑

翻成泣（是と言ふも 定めて非なるを知り、笑はんと欲して翻つて泣を成す）」と。

3 展転不能寐 4 徙倚独披衣

「展転不能寐」寝返りを繰り返すばかりで眠れない。魏文帝曹丕「雜詩」二首（『文選』卷二十九）其一に「展転不能寐、披衣起彷徨（展転として寐ぬる能はず、衣を披て起ちて彷徨す）」と。「展転」、疊韻、次の「徙倚」と対。

「徙倚」さまよう。疊韻。意味は彷徨とほぼ同じ。「古詩十九首」其十六に「徙倚懷感傷、垂涕沾双扉（徙倚して感傷を懷き、涕を垂れて双扉を沾す）」。

「披衣」服を羽織る。右の曹丕「雜詩」二首其一に見える。

5 悽悽曉風急 6 唵唵月光微

「悽悽」もの悲しい様。謝靈運「道路憶山中詩」（『文選』卷二十六）に「悽悽明月吹、惻惻広陵散（悽悽たり明月吹、惻惻たり広陵散）」とある。「明月吹」「広陵散」はいずれも琴曲の名。

「曉風」夜明けに吹く風。沈約「詠雪应令詩」に「夜雪合且離、曉風驚復息（夜雪 合ひて且く離れ、曉風驚きて復た息む）」。

「唵唵」薄暗い様。漢・無名氏「古詩為焦仲卿妻作」（『玉台』卷一）に「唵唵日欲暝、愁思出門啼（唵唵として

日 暝ならんと欲し、愁思 門を出でて啼く）」。

7 室空常達旦 8 所思終不帰

「達旦」そのまま夜が明けてしまう。魏・嵇康「養生論」（『文選』卷五十三）に「内懷殷憂、則達旦不瞑。（内に殷憂を懷けば、則ち旦に達するまで瞑らず。）」とあり、李善注は「漢書」劉向伝に「夜觀星宿、或不寐達旦。（夜は星宿を觀て、或いは寐ねずして旦に達す。）」とあるのを引く。

「終不帰」とうとう帰つて来なかつた。梁・張率「遠期」（『玉台』卷六）に「遠期終不帰、節物坐将变（遠期終に帰らず、節物 坐るに将に变せんとす）」と。

隋・盧思道「有所思」

【本文及び書き下し】

- | | |
|----------|--------------|
| 1 長門与長信 | 長門と長信と |
| 2 憂思並難任 | 憂思 並びに任へ難し |
| 3 洞房明月下 | 洞房 明月の下 |
| 4 空庭綠草深 | 空庭 綠草 深し |
| 5 怨歌裁潔素 | 怨歌 潔素を裁ち |
| 6 能賦受黃金 | 能賦 黃金を受く |
| 7 復聞隔湘水 | 復た聞く湘水を隔つと |
| 8 猶言限桂林 | 猶ほ言ふ 桂林 限らると |
| 9 悽悽日已暮 | 悽悽として 日 已に暮れ |
| 10 誰見此時心 | 誰か見ん 此の時の心を |

【日本語訳】

- 1 長門宮の陳皇后も長信宮の班婕妤も
- 2 心の奥底の憂いには遣り切れなかつただろう
- 3 寝室は明るい月の光に照らされ
- 4 人の気配のない庭には緑の草が生い茂った
- 5 白い絹を裁断して扇を作ったことを哀しく歌い
- 6 賦の名手の司馬相如は百金をもらい受けた
- 7 その上、湘水が二人の間を邪魔するという歌を聞き
- 8 その歌は、桂林のあの人とは隔てられていると歌う
- 9 もの寂しく夕陽が沈み夜になろうとする
- 10 今この時のわたしの気持ちは誰にも分かかってもらえない

【校勘】

- 『文苑英華』卷二〇二・『古詩紀』卷一三二
- 5 「潔」、『英華』注云「一作『紈』。『詩紀』同。

【押韻】

「任」「深」「金」「林」「心」、下平二十一侵韻。

【作者】

五三一？～五八二？。北朝末期から隋初の文人。字は子行、范陽（河北省）の人。名家に生まれ、聡明で弁舌に優れ、快活で奔放な性格だった。北斉の実力者だった

楊彦遵の推薦によって初めて出仕し、中書省に勤めた。北斉の天保十（五五九）年、文宣帝が崩じた時、朝廷にあった文人たちがそれぞれ十首の挽歌を作り、朝廷で優れた作を選んだが、他の文人たちが一二首を採用されただけだったのに対し、盧思道は八首も採用され、当時の人々に賞賛された。彼は北斉から北周を経て隋初までの時代を生きたが、自らの才能と家柄を恃んで人と衝突することが多かったため、官途には恵まれなかった。『隋書』卷四十七に本伝がある。

『隋書』本伝、経籍志には、集三十卷があつたとするが、今日では詩二十八首、文十三篇を伝えるのみ。明・胡應麟『詩藪』内篇卷三に「六朝歌行可入初唐者、盧思道『從軍行』・薛道衡『予章行』。音響格調咸自停勻、体氣豊神尤為煥發。（六朝の歌行の初唐に入るべき者は、盧思道の『從軍行』・薛道衡の『予章行』なり。音響格調咸自停勻、体氣豊神尤も煥發為り。）」とあるように、初唐の七言歌行体の先駆けとなったことを評価される。また、隋・陸法言『切韻』序に、開皇（五八一～六〇〇）の始め、盧思道・顔之推・薛道衡ら八人が陸法言の家に集まり、音韻について討論を交わし、後に『切韻』にまとめられたことが記載されている。

【語釈】

- 1 長門与長信
 - 2 憂思並難任
- 「長門与長信」寵愛を失った女性が退居する後宮。長門

は漢代の宮殿の名。漢の陳皇后は武帝の寵愛が衰える
と長門宮に退居したが、司馬相如に黄金百斤で「長門
賦」を作らせた。それを読んだ武帝は心に感じるところ
があり、寵愛を回復した。費昶「有所思」に「上林
鳥欲飛、長門日行暮（上林 鳥 飛ばんと欲し、長門
日 行ゆく暮れんとす）」とあった。長信も漢代の宮
殿の名。漢成帝の寵愛を失った班婕妤が退居した。簡
文帝「有所思」に「昔未離長信、金翠奉乘輿（昔 未
だ長信に離らざりしとき、金翠 乘輿を奉ず）」とあつ
た。また、梁・孔翁婦「奉和湘東王教班婕妤詩」〔玉
台〕卷六に「長門与長信、日暮九重空（長門と長信
と、日 暮れて 九重 空し）」と。

〔憂思〕心の奥底の憂い。魏・曹操「短歌行」〔文選〕
卷二十七に「慨当以慷、憂思難忘（慨して当に以て慷
すべし、憂思 忘れ難し）」。

〔難任〕堪え難い、たまらない。魏・王粲「七哀詩」三
首其二〔文選〕卷二十三に「羈旅無終極、憂思壯難
任（羈旅 終極無く、憂思 壯にして任へ難し）」。

3 洞房明月下 4 空庭綠草深

〔洞房〕女性の寢室。閨房。「長門賦」に「懸明月以自照
兮、徂清夜于洞房。（明月を懸けて以て自ら照らし、清
夜に洞房に徂く。）」とある。また、齊・陸厥「李夫人
及貴人歌」〔玉台〕卷九に「洞房明月夜、对此淚如
珠（洞房 明月の夜、此れに対すれば 涙 珠の如し）」

と。

〔空庭綠草深〕寵愛が衰え、庭から人の気配が消え、草
ばかりが生い茂る。班婕妤「自悼賦」〔漢書〕外戚伝
下・班婕妤の「華殿塵兮玉階落、中庭萋兮綠草生。
（華殿には塵あり 玉階には落あり、中庭 萋として
綠草 生ず。）」に基づく。

5 怨歌裁潔素 6 能賦受黄金

〔怨歌裁潔素〕班婕妤が長信宮に退居し、右に引いた「自
悼賦」と同時に「怨歌行」〔文選〕卷二十七、「玉台」
卷一作「怨詩」を作り、「新裂齊紈素、皎潔如霜雪。
裁為合歡扇、团团似明月（新たに齊の紈素を裂けば、
皎潔 霜雪の如し。裁ちて合歡扇と為せば、团团とし
て 明月に似る）」（皎、「玉台」作「鮮。」）と歌った
ことをいう。『漢書』には「怨歌行」を作ったという記
事は見えず、『玉台』に「昔漢成帝班婕妤失寵、供養於
長信宮。乃作賦自傷、併為怨詩一首。（昔 漢成帝の班
婕妤 寵を失ひ、長信宮に供養す。乃ち賦を作りて自
ら傷み、併せて怨詩一首を為る。）」との序が付けられ
ている。

〔能賦受黄金〕右に触れた司馬相如「長門賦」の故事を
いう。これも『漢書』には見えず、『文選』卷十六に収
める「長門賦」に「孝武皇帝陳皇后時得幸、頗妒。別
在長門宮、愁悶悲思。聞蜀郡成都司馬相如天下工為文、
奉黄金百斤為相如文君取酒、因于解悲愁之辭。而相如

為文以悟主上、陳皇后復得親幸。(孝武皇帝の陳皇后時に幸せらるるを得るも、頗る妒む。別に長門宮に在りて、愁悶悲思す。蜀郡成都の司馬相如の天下に工に文を為るを聞き、黄金百斤を奉じて相如と文君の為に酒を取り、因りて悲愁を解くの辞を于らしむ。而して相如 文を為りて以て主上を悟し、陳皇后 復た親幸せらるるを得たり。) という序がある。

7 復聞隔湘水 8 猶言限桂林

「湘水」「桂林」湘水は広西壮族自治区の東北部に源を發し、湖南省を東北に流れ、瀟水と合流して洞庭湖に注ぐ。桂林は同じく広西壮族自治区にある。漢・張衡「四愁詩」(『文選』卷二十九、『玉台』卷九)二思に「我所思兮在桂林、欲往從之湘水深(我が思ふ所は桂林に在り、往きて從之れに従はんと欲すれば 湘水深し)」と。隔、限、いずれもへだてる。

9 悽悽日已暮 10 誰見此時心

「悽悽」もの悲しい様。裴讓之「有所思」に裴讓之「有所思」に「悽悽曉風急、曖曖月光微(悽悽として 曉風 急に、曖曖として 月光 微かなり)」とあった。

「日已暮」夕陽はもはや沈んでしまった。謝朓「江上曲」に「易陽春草出、踟蹰日已暮(易陽 春草 出で、踟蹰として 日 已に暮る)」。

「誰見」誰も分かってくれない。梁・陸倕「以詩代書別

後寄贈詩」に「行者日超遠、誰見別離心(行く者は日び超遠、誰か別離の心を見ん)」。